

HEALING THE WOUNDS OF HISTORY: 南京の悲劇の歴史に共に立ち向かう日中文化

アルマンド・ボルカス

(MFA, MA, MFT, RDT/BCT, カリフォルニア統合学研究所準教授,
リビングアーツカウンセリングセンター所長,
リビングアーツプレイバックシアターアンサンブル ディレクター)

はじめに

2009年10月、私は揚子江の河岸に立って、中国人の老父が濁った流れに釣り糸を垂らすのを見ていた。彼もまた南京の悲劇の証人かもしれない。私の目には、あたかも老父が広大な河の流れから日中戦争における中国の忘れられた被害の記憶の断片を釣り上げようとしているかのようにみえた。

72年前の1937年、この場所で何万人もの中国人が日本軍によって殺害され、その血で河は赤く染まったという。死体が南京市内を流れ、すでにトラウマを覆っていた市民を更に震撼させた。男性、女性、子供にかかわらず殺害され、2万人にのぼる女性や女兒が残酷な強姦や性奴隷の被害に遭ったことは、“Rape of Nanjing”（南京のレイプ）として知られるようになった。

景色を眺めると、犠牲者の血が滴ったこの土の上にも、地元市民がカボチャや茄子などの野菜を植え育てているのが見えた。12億の人口を支えるこの国の、実用的な土地の使い方であり、集団トラウマのグランドゼロとも言えるこの土地に、皮肉にも野菜が実っていることが私を感動させた。地球が恐怖の出来事さえ新しい命と美に変容させる力を持っていることに、改めて敬意をいだかずにはいられなかった。森林の火災が生態系を破壊しても、雨が触れば草が生えて来るように。

ピクニックテーブルでは、10代の少年少女達がトランプをしていた。この日は祝日で、中華人民共和国は国を挙げて毛沢東と共産党が政権を樹立した1949年からの建国60周年を祝っていた。錆びた大型トラックが何かたくさん物を

積んで通り過ぎながら、しきりに大きく重低音なクラクションを鳴らした。中国の急速に発展する経済力を象徴しているかのようであった。戦争によって、この大国の威厳と誇りが、隣国を制する権利を信じ酔いしれた小さな強国に踏みこまれてしまった後でも、私が今ここで目にするものすべては、生命は続いてきたことの証であるように思えた。

この穏やかな景色の中に、深い悲しみに涙むせぶ人達の声が聞こえる。涙の間には、やさしいスタッカートの音楽のような日本語と、軽快で氣息に満ちた中国語が混ざって聞こえてきた。京都立命館大学、南京師範大学、南京航空航天大学からの25人の日本人と中国人の学生と教師達のグループが、記念碑のある揚子江のほとりで一緒に儀式を行っていた。日本人と中国人の学生がペアになり、静かに記念碑への階段をのぼっていた。そして献花し犠牲者を追悼する祈りを捧げていた。日本人学生の中にはさらにひざまずき頭を下げ叩頭し、謝罪の意を表現している人もいた。その後、両国のグループはまた国別のグループで記念碑を囲み、それぞれのグループで悲哀を感じていた。中国人は被害者の、日本人は加害の重責に対する悲しみを感じただろう。厳粛な儀式の静寂に、日本人の苦悶の泣き声が時折大きく響いた。儀式の後、揚子江の見える岩の上に立って両国の学生達が抱き合い、慰め合っていた。

深い悲哀の共有

この儀式は4日間にわたるワークショップの最後の日に行なわれた。南京虐殺の歴史をテーマにしたこの集いに、筆者はファシリテータとして招待された。筆者が開発したHealing the Wounds of History（以下、HWH）には6つのステップがあり、その一つが「深い悲哀を感じ、それを統合するための芸術パフォーマンスや儀式を行なう」である。参加者はその大切なステップをこの儀式を通して体験していたのだ。

加害者と被害者の子孫が共に悲しみ、お互いの悲哀を認め合うことは、歴史の傷を癒すために欠かせない。両親や祖父母など、先祖の痛みは子孫に受け継がれ、その痛みが十分に哀悼されるまで代々受け継がれて行く。南京の記念碑ではこの日、主にこの歴史のトラウマの三世にあたる人達が、先祖から受け渡された悲哀を表現した。集団の悲痛な体験の和解・統合がはじまるまで、この

ように数世代の時間がかかることもある。

普通、悲哀のプロセスは、強い感情の波が予想の不可能な不規則さで意識の岸辺に波打ち、それは様々な方法で解決される。個人主義の文化では、死者に対する悲哀は、個人的な喪失感として体験される。日本や中国のような集団主義の文化では、感情的愛着は家族、コミュニティ、社会にまで及ぶ。喪のプロセスは、個の喪失によってできてしまった社会のほころびを修復できるよう集団を導くために行なわれる。

筆者は、臨床心理士、ドラマセラピスト、グループファシリテータとしてトラウマの出来事、特に集団に影響を及ぼす戦争や大量殺戮による悲哀に携わってきた。そのような惨事は多くの人々に影響を与え、トラウマは集団の共有するシナリオとアイデンティティの一部となる。

集団トラウマでは、出来事の最中はみな生き残ることにフォーカスせねばならず、失ったものに対する悲しみを十分に体験する時間はとれない。出来事が過ぎ去ると、フォーカスはサバイバルと新しい生活の再建となる。トラウマのインパクトは圧倒的で痛みを伴うため、隅に押しやられる。結果的に、文化全体が未解決のトラウマの瓦礫の上に歪んだ社会を再構築することになる。日本と中国もその例ではないだろうか。

HWH の最後には、ワークショップを通じた対話や模索の中で感じた気持ちや洞察を再統合し、完結を実感する必要がある。参加者は体験を振り返り、何を学んだかを認識し、それをどのように持ち帰り、世界の中にどういったやり方で表現していくのかをそれぞれが決める。それが、ここに記したような儀式的な要素をともなった創造的な方法で実現されていくのである。

歴史が及ぼす心理的影響

以下に、今回集った日本と中国の学生達が、歴史にどのように思考的また心理的影響を受けているか考察してみたい。これは日中の歴史を知らない読者が、中国人が日本人に遭遇する時、どんな情緒的緊張が存在しうるか理解できるよう促すためのものである。中国と日本はそれぞれ異なった歴史的な文脈を持ち、南京虐殺に関する詳細の多くは二国間の論争点になっている。はっきりさせておきたいのは、ここに記すのは、筆者の個人的研究と過去 15 年に渡ってワーク

ショッピングなどを通して日中の参加者と関わって来た中で理解した範囲の史的概観に基づくものである。筆者は歴史家ではないので、これらは絶対的史実としてここに提示するのではなく、南京で集いを振り返る上での歴史的なバックグラウンドとして記すにすぎない。

私は、異文化間闘争を扱う時に大切なのは、精密な歴史的史実だけではないと信じている。対立する集団同士は苦闘の歴史の詳細に関して決して同意しない場合もある。HWHのプロセスは、人々が自分の文化と歴史に関してどのように感じるか、そしてこれらがどのようにアイデンティティ、自尊心、精神的健康に影響するかを扱うものである。加害者と犠牲者の子孫が集団トラウマに関して何を感じるか、どのように精神に内在させているか、またこのトラウマを解決するために何を必要とし、お互いに何を求めているのか。これらはHWHの根本的な問いであり、闘争の解決策を探し求める外交や政治において頻繁に見落とされることでもある。

太平洋戦争は広島と長崎への原子爆弾の投下と1945年8月の日本の降伏で終結した。日本は中国や他のアジア諸国を占領し、人々を残忍な強制労働、医学の人体実験、性奴隷に強いた。米国はソビエト連邦や、後の中国という共産主義の脅威が出現したため、冷戦期における共産主義に対する戦いのための同盟国として日本を欲した。このため連合国は、戦犯法廷を設置し多くの主要軍人や政治家を裁判にかけたものの、「平和と人類に対する犯罪」に関しての責任を全面的に追及し、戦後の日本政府や天皇の恥晒しをすることには消極的だった。

日本における記録的な経済成長は「経済の奇跡」と言われ、日本は経済超大国として世界の舞台に押し出される。日本国は未来に目を向けることに集中し、歴史の教科書は、1940年代から1920年代にかけての日本の軍国主義について未練がましく語ることを避けた。また、日本は広島、長崎への原爆投下の歴史もあるため、加害者と犠牲者両方の面を持つことに苦しんだ。日本の政府関係者の中には、なんとか中国への謝罪に向けて手を打とうとするものもあれば、謝罪を取消すかのようなぎこちない行動をとるものもあった。これらの振る舞いは戦争犯罪における責任受諾への国家のためらいを反映している。それは、日本という集団に恥をもたらし、屈辱的過ぎた。「面子を保つ」という文化的価値

観は日本社会が歴史の遺産を直接振り返ることを妨げた。

中国の歴史的な傷は深く、過去は忘れられてはいない。日本の軍国主導者らによって着手された戦争で、およそ 2000 万人の中国人が死んだ。莫大な集団トラウマの余韻は文化の中で未だ響き止まない。日本の戦時下における残虐行為の記憶は、中国政府や政府による教育の中で生きており、日本への憎しみは、中国社会の統一因子としてまだ時折機能している。記念碑や博物館は第二次世界大戦中の日本の「悪行」について詳細に思い起させる。日本の残虐行為のイメージは学校で見せられ、歴史として教えられ、それによって子供の頃に悪い日本軍の夢を見たという人にも筆者は出会ったことがある。同時に日中は経済における新たな協力関係を結ぶことを試みているが、歴史の亡霊は、2つの強力な文化間の関係を脅かし続けている。

このような歴史を背景に、京都立命館大学の村本邦子博士は、2009年に日中の心理、歴史、教育、平和学を専攻する学生を対象にした対話の試みを企画した。南京市で行なわれたこの心理的、感情的和解と癒しのプロセスのため、筆者はファシリテータとして招かれたのである。

Healing the Wounds of History

筆者自身、アウシュビッツ強制収容所のユダヤ人抵抗運動家の生存者の息子としての和解の旅路で、国や文化がどのように加害、被害、集団トラウマの遺産を統合するのか理解を試み、特に集団トラウマが代々どのように受け継がれていくのかについて考えてきた。また、心理療法家として、芸術を用いて集団トラウマによって引き起こる文化間紛争を解決するアプローチを開発することに尽力してきた。世界中で今も起きている手に負えないような文化間紛争の数を考えれば、トラウマが個人と集団におよぼす精神的影響に対する革新的対処法を見つけるのは必須であろう。ドラマや表現アーツセラピーのテクニクには変容を引き起こす可能性があり、トラウマの再発と加害のサイクルを終わらせるための強力な道具となる。

HWH（元々は Acts of Reconciliation と呼んでいた）は、筆者が演劇のテクニクを使って、共通した歴史のトラウマを持ち、葛藤関係にある集団の和解を促すドラマセラピーのプロセスとして始めた。1989年に、ユダヤ人虐殺生存

者の子孫とナチスの子孫を集めて、初めてこの試みを行なった (Volkas, 2009)。その後、大量殺戮の遺産や闘争の歴史を持つ他の多くの文化の和解に、このアプローチを使ってきた。ごく最近試みた例では、イスラエル人とパレスチナ人、アルメニア人とトルコ人、スリランカ内戦後のタミル族とシンハラ族などがある。

理論と原理

HWH はいくつかの理念に基づいている：

集団トラウマとは、グループの中で集団的に共有された心理的な状態であり、社会全体に影響をおよぼす可能性がある (Kellermann, 2007)。集団トラウマの衝撃は、私達の精神に、イメージやストーリー、感覚的記憶、また、両親や教師、メディアから送られる有言無言のメッセージとして内在する。そしてこのプロセスは、集団が共有する物語として発展する。この物語とは、浸透と同様の過程で無意識に吸収され、個人やグループの文化、国家のアイデンティティに影響を与える。

トラウマの世代観連鎖は現存する現象であり、奴隷制度、レイプ、大量殺戮などの残虐な行為から数世紀がたっても、それらの破壊的な影響の継続は顕著である (Danieli, 1998)。歴史のトラウマもまた親から子供へと引き継がれていく。例えば、戦争体験による PTSD が直接的原因となって、ある父親のアルコール中毒や鬱が引き起こされたとしよう。治療の中では、歴史的また集団的トラウマの側面が包括的に解決されなかったとする。その継承者である子供は、表現されることのなかった深い悲哀を受け継ぎ背負うことになる。多くの場合それは意識外にあり、本人に自覚されることはない。

また、歴史のトラウマは**文化や国家のアイデンティティと自尊心**にマイナスの効果をもたらす。人間は、部族を成す生き物であり、自らが属する部族に関してプラスの感情を持つことを必要としている。このような属することへのプライドが、戦争トラウマ、屈辱、敗北、征服の歴史などによって混乱すると、集団の自意識にネガティブな影響が及び、抑圧の内面化か起る。これは個人が自らの文化に対する見方や評価に影響を与えることになる (Grier & Cobbs, 1968; Klein, 1980)。

また HWH は、すべての人の中には潜在的な加害者がいる・ある状況に置かれると人間性抹殺や残酷行為を行なう可能性を、すべての人が持っているという見解に基づいている。

私達が、人間の持つ欲、感情、および無意識の衝動を理解し、考慮しないかぎり、文化間闘争の永久的な政治的解決はありえないだろう。私は、それぞれの文化を代表して集う参加者と共にこのテーマに働きかけることによって、集合的、社会的なトラウマに治療的介入をしようと試みている。この試みはサイコドラマの開発者ヤコブ・モレノの哲学にも関連している。「本当に治療的である手段は、人類全人類の治療を目的とする手段に他ならない。」(Moreno, 1953) HWH は闘争の解決への心理的アプローチであり、対立するグループが感情の吹き荒れる荒野を旅することを手助け、和解に辿りつくための地図を提供するものである。従って、このアプローチは社会運動の一種であるとも言えよう。

文化間の和解におけるドラマセラピー

過去 20 年間、対立するグループの和解に携わる中で、私は数日間かけて行なわれるプロセスの中で展開する 6 つのステップを特定した。これらのステップは、必ずしも順序的に現れるのではなく、その時に集まったグループにおける安全性や文化的背景、集団トラウマとの感情的・芸術的な距離などを含むその時のグループの事情によって左右される。

6 つのステップ

最初のステップは、対立する文化の人々が一緒に集まり、お互いに話しかけたいいけないというタブーを破ること。そこには大抵接触を避けるための見えないバリアが存在している。「敵」に話しかけることは、裏切り行為と見なされることが多い。しかし対立したグループがタブーを破り、誠実に会話をした時、お互いに対して持っていた幾重にも重なった未解決の感情に取り組み始めることができる。私は、後に続く人々のために道を切り開く感情のパイオニア達とワークをするのである。

2 つ目のステップは、自分たちのストーリーを話すことによって、お互いに人間性を見出すことである。お互いの話に深く耳を傾け、お互いの痛みが聞こ

えるようになると、彼らはお互いを気遣うようになる。共感と友情という気持ちが、憎しみ合うことへの歴史的な衝動よりも強くなる。

信頼関係が深まると、自分達の中に加害者がいることを認める3つ目の段階に入っていく。和解をするためには、人間は究極の状態に置かれると、誰でも残虐な加害者になる可能性を持っているのだと認めることが必要だ。この真実を受け入れることこそが、ワークの中でグループが平等になる最高のバランス装置であり、土俵が平らになる。

4つ目のステップでは、深い悲哀の共有に入っていく。共に悲しみ、お互いに悲しむ許可を与えることは、極めて重要なことである。人は、自分たちの両親の、祖父母の、そして先祖の傷みを引き継いでおり、この傷みを十分に嘆き悲しむことがなければ、歴史の遺物は次の世代へも引き継がれることになる。

5つ目のステップで、記憶回想や統合のための儀式やパフォーマンスに移る。対立したグループは、自分達が複雑で難しい歴史を共有していることを公然に認めるため、記念のための儀式やパフォーマンスを行う。このような儀式が、自分達の感情を芸術や美を通して伝える方法をもたらしてくれる。一般公開をする場合もしない場合もあるが、一般公開のパフォーマンスや儀式は、ワークショップに参加していなかった人々の命や意識に触れることになり、和解という癒しの効果を社会にもつなげることができる。

このプロセスの最終段階は、ワークショップで達成されたことを世界に広げるために、それぞれが創造や奉仕をする決意をすることだ。HWHは、歴史のトラウマが本当に理解され、その人の肯定的な人生観に再統合されるためには、個人的な方法で解決される必要があるという確信に基づいている。このプロセスが、個人的体験と集団体験の橋渡しとなる。

最初に、私達は歴史に直面し無意識で感情的な反応や思い込みを意識化する必要がある。そうすることで、自分達に創造や奉仕の行為によってトラウマを変容させる機会を与えることができる。HWHが参加者にトラウマ的なイメージや、記憶、受け継いだメッセージを使い、そこから芸術や社会活動を生み出すことを促すのは、それがトラウマを克服するもっとも強力な方法だという原理が背後にある。トラウマを受け継いだ人は、トラウマは決して消え去ることはなく、自分がそれと永久的な関係性を持つということを認めることによって、

トラウマに対する否定や拒絶という拷問から解放される。遺産を受け入れることによって、拘束され表現されることのなかった感情的なエネルギーが解かれ始める。

創造とは、話をする事、詩、美術、演劇などの創作によって過去の痛みを美的なフォームに変容させることだ。もう一つのやり方は、参加者のエネルギーをなんらかの奉仕活動に導くことだ。政治難民との活動、レイブサバイバーへの援助など、不正を終わらせ、起こった不正に対する償いを助ける様々な活動があるだろう。

南京での集い

村本邦子教授から、南京師範大学と京都立命館大学の中国人と日本人学生の対話のファシリテータを容易にするように依頼があった時、私は深く光栄に思った。私はアメリカ人で、日本や中国の文化において部外者であるにもかかわらず参加者が授けてくれた信用は、私を謙虚にさせた。私はアジアの第二次世界大戦の遺産にはこれまでも関わってきた。1994年から米国や日本で、日本人、中国人、韓国人、他のアジア諸国の人々を対象にこのテーマでワークショップや公共のプレゼンテーションを10回ほど行ってきた。しかし、南京の悲劇が正に起こったその土地で、私のアプローチを使って歴史的なトラウマに働きかけるといふこの試みは新しい経験だった。

集いの初日は、フォーマルに開始された。南京師範大学の歴史学教授である張連紅博士、シンポジウムを主催する村本邦子博士、および私が今回の集いを開催するにあたってのコメントを述べ、参加者を歓迎した。また中国人学生二人と日本人二人が2007年に行なわれた対話を振り返った。そして25名の参加者全員が簡単な自己紹介をした。

初日の午後、日中の参加者全員がバスで南京大虐殺記念館に移動した。参加者は単独で、または小グループで記念館を見学した。記念館は、処刑場や戦後に発掘された大規模な死体埋没地の周りに建設された。記念館は南京大虐殺の犠牲者を追悼するために1985年に設立され、白黒の花崗岩の建築が厳粛さや崇敬感といった雰囲気を与えている。展示は歴史的記録や彫刻、悲惨で不穏な歴史の一章を綴るビデオや映像などから成り、博物館の恐ろしいイメージは、私

たちの脳裏に焼き付いた——集団レイプされた女性の苦悶の目、生き埋めにされようとしている男性の恐怖の顔、苦悶して空を見上げる母親に抱かれた死んだ幼児の巨大な金属彫刻。

このようなイメージに満たされ、また深く影響を受け、参加者は博物館の戶外スペースのベンチのまわりに集まった。HWHのプロジェクトで頻繁にコラボレートし、コ・ファシリテートする日本人の表現アーティスト笠井綾によって、オイルパステルと画用紙が配られた。日中混合の5人でひとグループになり、苦痛な歴史に直面することから生じる複雑な気持ちに形を与え始めた。彼らは一人ひとり、自分の持つイメージを紙に表していた。すると、他の記念館入館者達が、子供も大人達も一様に、芸術家達が一体何をしているのだろうと興味津々に覗き込んでいた。この公共のオープンスペースで行なわれた創作活動を、皆じっと興味を持って見守っていた。

芸術プロジェクトの完成の後、小グループで集まって、それぞれが作成した芸術的なイメージと、それに対する感情的な反応についての対話が行なわれた。このプロセスは記念館見学によって沸き上がった気持ちに器を与えるものだった。描かれたイメージには、目——知らなかった歴史の一部を知って目の覚めるというテーマや、このような凄まじい人間の体験に直面しても希望を失いたくない、といったテーマが表されていた。

翌日、全員でHWHのプロセスを始めた。遊びの要素が多く入ったドラマセラピーの技法の一連を使ってグループを導いた。この段階ですでに大きなエネルギーが発散され、日中の学生がお互いと遊ぶことをどんなに必要としているかがとても明白に現れ、私は心を打たれた。潜在的に爆発の起こる可能性のあるグループ環境に入っていく時、私のドラマセラピストとしてのひとつの作戦は、最初にウォームアップをしてグループの自発性や想像力を発展させ、その後に行なわれるドラマを使ったプロセスに備えることだ。「遊び」は、異文化間闘争の和解の中での多くの機能を持つ。ただ人間としてお互いに関わることを通して、参加者の子供のような自我の状態を引き出すことができる。彼らは、「遊んでいる」という状態の中でお互いの共通点を見つけ、陰悪的にならない方法でコミュニケーションすることができる。これが後にプロセスの中で発展させていく「絆」の始まりになる。

戦争のトラウマという深刻なテーマを扱っているのにも関わらず、このように遊びを導入することは、不自然に思えるかもしれない。しかしながら、対立するグループの中に遊びの感覚を発生させるのは、恐怖と不信に覆い尽くされた場所に足がかりを築くために、外すことのできない大切な第一歩となる。多くの人にとって、遊びが許されるということは、彼らが引き継いだ集団トラウマのイメージの負担に対するとてもよい解毒剤だ。彼らの中にある parentified child（親化した子供）は、失った純真さを取りもどす過程の中で部分的に解放されていく。

私は徐々に集いのテーマを反映したエクササイズを導入し始めた。多くの文化間闘争には、それについて言語化されることはなくても、謝罪の要求や謝罪をしたいという願望が存在する。このような緊張は日本と中国の関係においてもはっきりと存在している。Line repetitions という台詞を繰り返すエクササイズでは、「ひどいよ」、「ごめんなさい」という台詞をペアで繰り返し、どのような気持ちが湧いてくるか探求するが、このワークショップの中でもそれは特別意味のあることだったようだ。

徐々に、集いの重大なテーマが導入され、グループのプロセスは step-in sociometry（社会の輪）というエクササイズを通して、より深まっていった。まず参加者が円を作り、私がある事実を投げかけ、それに該当すると思った人は一歩前に出る。例えば、「祖父が軍人だった人は一歩前に出てください。」「両親や祖父母が戦争体験を話してくれた人。」「あなたの家族が体験したことや行なったことを恥ずかしいと思う人。」一歩前に出た人同士は、お互いに静かにアイコンタクトをとってまた大きな輪に戻る。参加者がこのエクササイズのやり方を理解すると、今度は自分達で質問を投げかける。「学校や家族から日本人を憎むよう教えられた人。」「起こったことに悲しみをを感じる人。」この技法は、グループの中に存在する感情的なテーマに少しずつ近づき、なぜここに集ったのかという理由に焦点を合わせることに役立つ。

このプロセスは、もっと深く中国人、日本人のアイデンティティがそれぞれどのように構築され、歴史がお互いの文化の精神にどのように影響を与えているかの探求へと発展した。ウォームアップからより個人的なストーリーの分かち合いへ移るために、「私の名前は〇〇です。私は〇〇人です。」というエクサ

サイズをした。一人でグループの前に立ち、英語かまたはその人の母国語で自分の氏名と国籍と属する文化を名乗ってもらう。一文言うごとに沈黙の時を持つ。そしてアイデンティティを公言することでどのような気持ちやイメージが浮かんでくるか、ファシリテータが尋ねる。参加者が、どのように自分の文化的アイデンティティを形成しているのかという記憶にアクセスすることを助ける、あえて挑発的ともいえるエクササイズである。

このワークショップでは、シャン（プライバシー保護のため仮名を使い、詳細を変更）という中国人の女性が、彼女の文化的アイデンティティについて探求するためにグループの正面に立った。シャンは、日本に留学していて最近中国に戻った。「私の名前はシャン・リュウです。そして、私は中国人です。」と、彼女は声を出して言った。それに続く沈黙の中で、彼女の目には涙が浮かび、彼女は手で顔を覆った。実は南京に来る直前に、第二次世界大戦では日本とも戦っていたシャンの祖父が亡くなっていた。子供の頃から温かく優しい存在だった祖父に対する愛情と深い敬意を表し、シャンは南京でこうして日本人と対話することが彼女にとって特別な意味を持っていることを語った。シャンは、学生として日本に住んでいた間、中国人であることにためらいと恥を感じていたことを認めた。中国の人としての彼女の痛みは、周りの誰にも見てくれないと感じることもあった。日本人の学生や教授らは、日本が中国に与えた戦争による精神的な傷に気付かないようだった。この経験は彼女にとって屈辱的で傷つくことだった。しかし、グループの前に立った時、生まれて初めて中国人としての誇りを感じ、自分の家族が破壊的な時代を乗り切る強さをもっていたことに、とても敬意を持っていると言った。また、シャンは、彼女の祖父がこの瞬間に彼女に会うことができたなら、とても誇りに思ってくれる気がしたと言った。

続くエクササイズでは、参加者がそれぞれ日本人、中国人としてのアイデンティティを用意された図表に書き込み、それを「人間の彫刻」にすることでさらに深く探求した。私はこれを diagram of roles and messages（メッセージの地図）と読んでいます。これは、両親、先祖、社会、教育機関、権威者、政府、または神から自分が受け取ってきた、肯定的、否定的、言語的、非言語的な様々なメッセージがいかに内面化され、自己の信念、アイデンティティ、自

尊心に影響しているかをサイコドラマ化し、それを彫刻のように表すエクササイズだ。「主役」は自分の地図と内的体験を表現するため、グループのメンバーを配役し、ポーズや台詞を与える。

ヒデオという日本人男性（プライバシー保護のため、氏名や詳細を変更）が例となり、日本人としての重荷を体現するような人間彫刻を作り上げた。ヒデオは参加者に色々な役やポーズ、声に出して言う台詞を与えた。参加者の一人が役に入って、ヒデオが腕をのばして中国人に友情を求めている様子を表し、彼の拒絶への恐れは、もう一人の参加者がそれを押しつける侮辱的な中国人のポーズとして表された。このイメージは、ヒデオが、中国人参加者が本当は南京虐殺に対して激怒しているため、自分とは関わりを持ちたくないのではないかという恐れを表現していた。ヒデオはまた、自分の民族の誇り高いイメージから外れるなど自分に警告する父親の姿を、ある参加者に配役して彫刻した。また彼は、日中の対話に関わることは危険だから、あまり深入りしないように懇願する母親も彫刻で表現した。ヒデオは母親役をする中国人学生に「日本の右翼の敵になるかもしれないよ！注意なさい！」という台詞を与えた。さらにヒデオは、何人かの参加者を右翼を体現するものとして配役した。そして「南京は嘘だ、誇張だ！」と威嚇するような国家主義的な台詞を与えた。また、彼自身の無垢の喪失を表現するポーズを日本人参加者に配役した。これは、ヒデオの無垢な「自己」が、第二次世界大戦中に日本兵士が行なった残虐行為を知り、受けたショックを表現していた。最後の彫刻には、ヒデオの友人達が「それは過去のこと。忘れなさい。未来を見よう。」と言っているイメージがつけられた。

この彫刻では、ヒデオはHWHのステップである「お互いと話してはいけないというタブーを破る」を表現していた。この場合ヒデオは、日本の論議の多い問題である南京大虐殺に立ち向かうことに対するタブーを破った。それだけではなく、彼は同世代の中国人学生とともに、犯罪が行われた地に来て、このタブーを破ったのである。

文化間紛争解決において、現在の敵、又は過去に敵だった相手に面と向かって会うというステップは、現状に対する挑戦の行為と受け取られることが多い。このような姿勢は参加者の勇気を必要とする。このように、最初に「敵」と対面

することを望む人々を私は「後に続く人達のために道をひらく感情のパイオニア」と呼んでいる。対立するグループが集まることは、実際危険を伴う。ファシリテータは、参加者の勇気と、対立グループが対面することの危険性を同時に認識し、倫理的に対話を進めて参加者を守らなければならない。または、少なくとも対話に関わることによるリスクに対する理解をインフォームド・コンセントを通して得なければならない。

このようなエクササイズは、個人の文化的、国家的アイデンティティを分解し、無意識の集成的な力がいかに私達の行動、信念、感情を形成しているかということに気付くために有効な方法である。私は、さらに深い感情的なワークを行なうための刺激として、よくこの技法を使う。しばしば、グループの中から感情のリーダーが現れ、ワークショップの扱うテーマや問題を次のレベルに持っていく役割をする。ひとたび強い感情がその姿を表すと、私はそれに色々なやり方で形を与えていく。それはサイコドラマ (Blatner, 2009) である場合もあれば、プレイバックシアター (Salas, 1993)、ソシオドラマ (社会劇) (Sternberg & Garcia, 2000)、即興や、創造的な儀式といった方法もある。

次に、カン (プライバシー保護のため、氏名や詳細を変更) という若い中国人の男性が、グループの前に出て個人的なストーリーをシェアした。カンは歴史を学ぶ学生で、自分の伝え聞いたストーリーの史実が調査されないまま読者に伝わることを懸念し、ここでそのストーリー自体については書かないように希望した。それは彼にとって、とても重要なことであり、私はそれを尊重する。史実より重要なのは、村の老人達から伝えられた残忍な日本兵の行為の詳細が、10歳だったカンに恐怖とトラウマを与えたということだ。村人達が語ったイメージは、彼を震撼させた。それは彼の想像を絶する人間の行動であり、子供の彼は日本人に「怪物」というイメージを抱くことになっただろう。その後、それは彼の日本人への嫌悪感へと発展した。

ワークショップの中でカンは、中国までほとんど自費で彼の持つ痛みを理解するためにわざわざ日本からやって来た共感的な日本人学生と対面し、難題を突きつけられる。その難題とは、二つのまったく異質な日本人のイメージを同時に抱えなければならないということだ。私は日中の参加者に、カンに深く体験的に共感してもらうために、プレイバックのやり方で、カンの内的モノロー

グ（独白）を即興で参加者に演じてもらった。

カンのストーリーは、大人の男性が、幼年期に受け継いだトラウマ的なイメージに取り組むというテーマだったが、これは中国人と日本人の不穏な関係の核心を突いたものでもあった。まさに、南京大虐殺記念館が記憶している「人間の悪魔」——悪霊として描かれた日本兵士のイメージが出てきた。このキャラクターイメージまたは元型は、部屋の中に怖い亡霊のように存在していたが、そのことについてまだ誰も何も言ってはいなかった。これは中国人、日本人双方にトラウマを与えて来た複雑なイメージであるため、深く探求する機会に見えた。また、もう一つのステップ「人間は誰もが加害者になる可能性を秘めていることを認める」に移るよい機会に思えた。

私はこのようなテーマをもっと発展させたかったが、時間的制約のある中で、三人もの通訳を通すことで、このデリケートなプロセスをファシリテートすることに限界が生じ、フラストレーションを感じた。また、私自身はこのような挑発的・対立的要素を掘り下げるのは名案だと思ったが、実際のところ、グループ全体の発展を見ると、HWHのまだ初期のステップにいることが認められた。参加者は自己開示や個人的ストーリーを共有し、お互いが深く共感することによって形成される絆や相手の人間性を認識するプロセスの途中にいた。まだ、怒り、激怒、憎しみのような複雑な感情を十分に表現し探求する準備、またそれによる潜在的な亀裂の可能性に耐える準備はできていなかった。私達すべての人間の中にある潜在的加害者の探求は、また次の機会に行なうことにしよう。私はこの事実を受け入れて、ワークショップを進めることにした。

私はまた、このようなダイレクトな文化間闘争へのアプローチは、西洋の個人主義的文化では有効だが、日本や中国のような文化でこのようなテーマを扱う時には、より間接的なアプローチが必要とされるのかもしれない、という可能性について考えた。

次に行なうエクササイズでは、参加者に隣の人と話をしてもらい、今回テーマにしている歴史や自分のアイデンティティの難しい部分について意識するようになった、または変化するきっかけとなったエピソードを思い出してもらった。こうして参加者を自己開示へと導き、自己の内と外の世界を体現することによって探求する技法であるサイコドラマへと発展させた（Blatner, 1988）。

次に、ファ（仮名）という中国人参加者が、彼女の村に住んでいた老女との関係についての話をシェアした。老女はラウさんといい、南京大虐殺の生存者だった。ラウさんが、日本軍が占領していた戦時中、日本兵士たちによって凶悪な集団レイプをされたことは知られていた。ラウさんは、村人達から避けられる存在で、自分の被害に対して深い羞恥心を持っていた。そのようなトラウマがあっても、なんとか自分の家族を築き、人生を全うしていた。

ファは20代の社会学の学生で、ラウさんに敬意を持っており、もっと話を聞きたいと思っていた。ファは支持的にラウさんに近づこうとしたが、老女は心を開くことはなかった。ラウさんには二人の息子がいて、政府と何らかの問題を起こしていた。一人は台湾政府との関わりの疑いをかけられ、もう一人は共産党とのトラブルがあった。これらのことはラウさんを不安に陥れ、彼女は息子達をとて心配した。これがPTSD反応を引き起こし、ラウさんが恐怖の表情を浮かべて亡くなっているのが発見された。ファは、ラウさんが死んだ本当の原因は、南京のレイプのトラウマにあったのではないかと思った。

ファは、ラウさんに対する愛敬の気持ちを伝えたかったが、今や遅すぎた。ファは話を説明する時、「私達の間にはまるで壁があるように感じました。」と言った。この話をサイコドラマとして再現する上で、私はファに壁を演じる人を何人か選んでもらった。3人の参加者が、カラフルなスカーフを持って、象徴としての壁を具体化するために立ち、彼女とラウさんの間に存在するバリアとなった。壁が戦争と老女のトラウマと羞恥心を象徴することは明白だった。ファはラウさんの役を演じる人をグループの中から選んだ。ラウさんは壁の向こうに立ち、ファは彼女に語りかけた。

シンプルだがとても感動的な対話の中で、ファはラウさんに対する敬愛と悲しみの気持ちを表現することができた。ファは、彼女に敬意を表したかったが、実際の人生の中ではそれを実現することは叶わなかった。しかし、サイコドラマでは、もうひとつの現実をつくることによって、現実には叶わなかったことを実行し、本当の相手とは感情的に解決できなかったことを解決する可能性が与えられる。

ファは、ラウさん役になりきっている参加者を抱擁してもいいかと尋ねた。私は彼女がぜひそれを実行し、今まで伝えることができなかった気持ちを全部

伝えるように励ました。二人は抱き合い、涙を流し、フアは思いを表現することができた。その後のグループでのシェアリングでは、日中の参加者が、このような癒しの瞬間の証人となれたことの感動を分かち合った。彼らもまた、このことによって癒されたと感じたようだった。

3日目に、83歳の南京大虐殺幸存者、常志強さんの証言があった。常さんは9歳の時、目の前で日本兵に銃剣で母と弟を刺し殺された。彼の話は南京大虐殺記念館で金属彫刻として、永久の命を与えられている。それは彼の母と、母の腕で乳を飲もうとしながら出血して死んでいく幼い弟の、だれもが忘れられなくなるようなイメージだ。常さんは大虐殺でほとんどの家族を失った。トラウマによって啞然となった姉の世話をしながら、残された二人はベッドの下に隠れたが、その隠れたベッドの上でも日本兵は女性を強姦した。

元々、常さんに恐怖と生存の話とを共有してもらうために30分から1時間の時間を設けたが、最終的には3時間を要した。彼はトラウマ生存者が話をする時に共有する、ある種の強烈さを持って語っていた——時には解離したように、時にはまるでそれが今そこで起こっているかのように、彼のトラウマ体験を追体験していた。話をしている彼の顔には、恐怖を味わった9歳の常さんが明白に現れていた。残り少ない大虐殺幸存者の一人である彼に敬意を表すためには、十分な時間が必要であるため、その日のために計画していたドラマセラピーのプロセスとは別のプロセスを行なうことになった。

常さんが話し終えたあと、コ・ファシリテータの笠井が、日中の参加者全員を、常さんが参加者にしてくれた贈り物に対する感謝の気持ちや、自分が証言を聞いて受けた影響について彼に伝えるという大事なプロセスへと誘導した。よく公の場で証言をしている常さんは、参加者の優しく、共感的で、敬意に満ちた言葉を受け取って、本当に感動しているように見えた。常さんが話すことによって、彼自身もグループも証人となり、無意味な恐怖体験に意味を見出し始めることができるのではないだろうか。

常さんとグループとのこの対話は、トランスパーソナルでスピリチュアルな感じがした。彼の話は、今や私たち全員のものになった。参加者の一人ひとりが彼と握手をし、そっと彼の肩に触れたり、お辞儀をしたりしながら、優しく親切で謙虚な幸存者は見送られ、別れを告げた。彼が部屋の外へ出て、また南

京の街の喧噪の中に戻っていくのを見送りながら、皆、彼の健康を願った。

ここまでの間、常さんのストーリーを取り込むのに5時間も時間を費やしていた。心を動かされるが、消化するのが難しいストーリーである。公然と涙を流す人もいれば、胃が縮み吐き気のする人、常さんの方を見ないようにして、彼から来るトラウマのイメージが自分の精神のあまり深いところにはいかないように願っているのではないかと見える人もいた。これらはすべてトラウマの二次受傷の兆候である。ファシリテータの私の考えは、感情に満たされた参加者は、体を通してこのトラウマを動かし、体験の消化を行なうことを必要としているということだった。

再び5人のグループに分かれ、5つの別々の人間の彫刻を作成することを提案した。参加者の一人ひとりが、グループの残りの4人を動かし、ポーズを与えて、静止した絵を創る。彫刻は、常さんの話からの場面でもよいし、感情的に受けた影響力の抽象的な表現でもよい。5つのグループが、すばやくそれらの彫刻の制作にとりかかった。それぞれのイメージにタイトルを与えて、そのイメージにどんな気持ちや意味が込められているのか一言説明を付けた。そして、出来上がった25すべてのイメージがグループ全員の前で分かち合われるよう、儀式のように次々と再び表現した。このエクササイズはグループにカタルシスの効果を与えているように思えた。参加者は、自分達の苦しい体験を消化し、そこから意味を見いだすことができたのだ。

トラウマ体験から意味を見いだすことは、集団トラウマと関わる私のワークの中で大切な意味を持っている。HWHのプロセスの様々なステップを行き来する中で、参加者はこの重要な感情の解放を体験する。自然な潮の満ち引きのように、感情の大きな波が現れると、ファシリテータは一步引いて、その波がグループ全体を巻き込むのを許すことが必要だ。波が引くことには、浄化と統合の効果がある。参加者が個人的な反応を分かち合うことで、グループは自分達の苦しみから意味のある彫刻を作り出すことができる。

最後の朝、この稿の初めにも説明した記念碑で儀式を行った。午後は、共に過ごした時間の完結に向かう必要があった。表現アーツセラピストの笠井が、参加者一人ひとりに粘土を手渡し、儀式を終えて、また歴史の遺産を探求する4日間を振り返っての気持ちを表現することを提案した。

日中参加者はそれぞれ、時間をかけて粘土の彫刻を制作した。それを部屋の好きな場所を見つけて展示してもらった。椅子やテーブルや床の上に彫刻が展示され、部屋はにわか美術館に変わった。参加者は一人ひとりの展示の周りに集合し、作者は作品の意味を語り、感情的なフィードバックを受けた。アートワークに表されていた主なテーマは、南京の集いが与えてくれた希望だった——日本と中国の人々との間の本当の和解が可能であるという希望。

最後に、全員と一緒に過ごして来た時間を振り返って、学んだことを簡潔に述べてもらった。多くの参加者、特に歴史を学ぶ学生達から、最初は芸術やセラピーのプロセスを使って歴史の問題に取り組むことに懐疑的だったが、今回の体験から芸術の持つ変容と癒しの力と可能性を信用するに至ったことを認める発言があった。ほとんどの参加者が、このような深く意味を持つ体験を得ることができたことに、感謝の気持ちを述べた。また、この4日間で日中の学生の間にも育った友情の親密さがとても明らかに見てとれた。

皆で過ごしたワークショップの最後の瞬間には、初日のプロセスで始めたような「遊び」に戻る必要があると考えた。そしてさらに統合を促すプロセスを行ないたかった。いくつかのドラマセラピーの技法を使って、私はグループがおとぎ話をつくることができるようにウォームアップをした。参加者が自分の気持ちや気付きと繋がり、おとぎ話を通して自分の創造性を表現できるよう願った。

まず、参加者にパートナーを見つけてもらい、とても限定的な指示を出した。「二人はこれから一緒にアレゴリー（寓話）をつくります。アレゴリーとは、話のキャラクターや行いを通して、人間の存在に関するコンセプトを理解するものです。この場合、即興でお話をつくり、アレゴリーを通して皆さんの4日間の体験を理解することを試みるのです。お話の中に登場させてほしい要素がいくつかあります。まずこのお話は、ひとりの日本人とひとりの中国人が一緒に第二次世界大戦からの癒しを求める旅に出ます。旅の途中で3つの物に遭遇します。一つは火を吹く竜、もう一つは魔法の河にかかる橋、もう一つは山の上に住む100歳のおじいさんとおばあさんです。これらのものと遭遇するたびに何かを学ぶのです。その学びが何であるかは、皆さんの即興の中での発見にお任せします。これは協力して作るお話です。まず一人がお話を作り始め、私が

「交代！」というまで続けてください。すると今度はパートナーが、その話が終わったところから続けて話を作るのです。そうしてかわるがわる一緒にお話を作って「終わり！」と言うまで続けてください。では始め！」

部屋はエネルギーでいっぱいになり、即興的なおとぎ話大会のようになった。どのグループも、語り、動作をすることによっておとぎ話を体現し、演じていた。以下に、このエクササイズから生まれたシンボル、テーマ、およびいくつかのストーリーを合成した物語を書いてみたいと思う。

日本人学生のアキと中国人学生のチェンと一緒に、癒しを求める旅に出ました。二人とも第二次世界大戦の遺産にとっても傷ついていました。旅の途中、二人は暗い森に入り込み、洞窟で火を吹く竜に遭遇しました。二人が洞窟の竜に近づくと、竜は火を吹きながら言いました。「なぜここに来た？この洞窟の中には秘密があって永久に誰も入るべきではない！」アキとチェンは竜の目の奥にある悲しみを見抜き、お茶を差し出しました。二人の優しさと温かさに驚いて、竜は受け入れ、3人は一緒にお茶を飲みました。お茶と優しさで竜の火はおさまり、竜は恥ずかしがり屋の小さな男の子に姿を変えました。二人は、共感と慈悲は竜の怒りまでも鎮めてしまうことができるのだと気づきました。男の子は洞窟の中に走り入り、アキとチェンも着いて行きました。

洞窟の中には日本人と中国人の孤児達が泣いていました。アキとチェンはこの子供達を引き取ってめんどうを見ることにしました。引き取った子供達を連れて旅を続けました。でも子供達は泣き止みませんでした。子供達は悲しみでいっぱいだったので、その涙で広くて深い揚子江のような河ができました。アキとチェンは、癒しに向かう旅を続けるにはこの河を渡らなければならないことがわかりました。この河でたまたま魚釣りをしていた漁師が魚を釣り上げました。その魚は話すことができ、アキとチェンに語りかけました。「孤児の痛みに耳を傾けなさい。やさしく抱きしめ慰めれば泣き声は止むでしょう。」アキとチェンは魚の言う通りにすることにして、魚に知恵を授けてくれたお礼を言い、魚を河に戻しました。アキとチェンは親を亡くした孤児達の悲しいお話に耳を傾け始めました。痛みに耳を傾けると泣き声は止み、涙の河の上に虹の橋が架か

りました。アキとチェンと子供達はスキップでこの橋を渡りました。

家族になった皆は橋を渡って旅を続けました。何日も旅を続け、大きな山にたどり着きました。お腹が減って、疲れていましたが、頂上に登る力をふりしほることができました。山の上には小屋があって、年老いたおじいさんとおばあさんが住んでいました。家族はお腹が減っていたので、小屋の扉をたたきました。おじいさんとおばあさんは扉を開け、皆を中に招き入れました。そしてスープを振る舞いました。スープを食べながら、アキとチェンはこの老婆と老父が、実は南京大虐殺の生存者であると気づきました。そして、食べているのは実はスープでなく、お椀一杯のストーリーなのでした。二人は自分達が歴史を消化しているのだと気づきました。消化するのが難しい具もありましたが、それは不思議にも感動的な満足感を与えるのでした。

こうしておとぎ話をつくるエクササイズは終わり、皆で円になって親指を円の中に突き出してもらった。隣の人の親指を握ることで、皆の手で真中に井戸ができた。これはメタファー的な井戸で、4日間のエクササイズを通して分かち合った、皆の個人的なストーリーをずっとこの中に入れてきたのだった。最後に一人ひとりが名前を言って、最後の人が名前を言い終えた時に、この集いが終了した。

おわりに

この稿では、読者がHWHを使った異文化間の紛争解決と集団トラウマへのアプローチの基本的な理解ができるよう試みた。また、2009年10月に行なわれた日中の学生の対話を例にして、HWHの説明を試みた。参加者のプライバシー保護のために、名前などいくつかの詳細を変更した。

南京の集いでは、参加者がそれぞれの文化的アイデンティティを振り返り、自尊心を妨げる要因を克服できるようにサポートした。それぞれの中で形成されているアイデンティティには、集合的なストーリーの断片の詰まったひびが横たわっている。これを解体することによって、様々な気持ち、連想、原点的感覚、感情の記憶が表出する。結局、私の目標は、日中の参加者が内に秘めて

いた加害と被害の集合的ストーリーのベールを剥がし、より生産的な方法で再統合するのを手助けするということだった。

また南京のワークショップでは、異文化コミュニケーションについても間接的に教えたと言える。しばしば、「他者」に話しかけることはタブーとされる。分極してしまった文化間では、お互いのステレオタイプをつくり、お互いを非人間的、悪魔的に描くため、話し合うというシンプルな行為は癒しにむかう上での大切なステップとなる。時には、お互いの文化に対する不理解や、人々の感情的、政治的スタンスに対する共感の欠落もある。自己開示し、ストーリーを語り合うことや遊びの要素を取り入れた HWH のプロセスは、対立する集団の緊張を一時的にほぐしてくれる。敵を人間としてみるのできるのである。

南京の参加者を HWH のプロセスに導く中で、過去から積み重ねられた深い悲しみに辿り着く段階があるだろうとわかっていた。最初にそれが表現されなくても、そのことについて誰も何も言わなくても、その大きな悲しみがそこに存在することに、私は気付いていた。トラウマを受けた集団は、受け継いだ痛みを彼ら独特のものとして感じる必要がある。南京大虐殺の痛みが十分に悲哀されなければ、トラウマ的遺産は次の世代へと引き継がれ続ける。今回南京の参加者は、自らの文化を代表して、その集合的悲哀を形にし、表現する機会を与えられたのである。

HWH の基本は共感を教えることだ。相手のグループの痛みを自分の痛みと比べて、自分の痛みの方が大きいと考えたくなる衝動は、誰にでもある。しかしワークショップの参加者達は、その衝動を超越し、相手の痛みに対して共感し、優しくなる能力を伸ばすことができた。このことによって、参加者は自ら解決せねばならないダブルバインドがつくられた——どうしたらこの人を憎み、また同時に共感することができるだろうか？

健全な人間は、自分の人生の意味と目的を見いだす必要がある (Frankl, 1984)。苦しみは素晴らしい教師である。トラウマの遺産、恥、罪悪感、屈辱がある時、しなくてはならないことは、それを意味あるものに変容させることだ。これはスピリチュアルな仕事でもあり、2009年10月に南京で行なわれた集いも、それを達成するための小さいけれど大切な一歩だったと確信している。

- Ancelin Schutzenberger, A. (1998). *The ancestor syndrome*: Hove and New York: Brunner-Routledge
- Blatner, A. & Blatner, A. (1988). *Foundations of psychodrama: History, theory and practice*. New York: Springer Publishing Co.
- Danieli, Y. (1998) *International Handbook of Multigenerational Legacies of Trauma*. New York: Plenum Publishing Corporation.
- Frankl, V. (1984). *Man's search for meaning*. Washington: Washington Square Press.
- Grier, W. & Cobbs, P. (1968). *Black rage*. New York: Basic Books.
- Kellermann, P. (2007). *Sociodrama and collective trauma*. Philadelphia: Jessica Kingsley Publishers.
- Klein, Judith Weinstein. (1980). *Jewish identity and self-esteem: Healing wounds through ethnotherapy*. New York: New York Institute on Pluralism and Group Identity, The American Jewish Committee.
- Moreno, J. L. (1953). *Who shall survive?* New York: Beacon House.
- Salas, J. (1993). *Improvising real life*. Dubuque, IA: Kendall/Hunt.
- Sternberg, P. & Garcia, A. (2000). *Sociodrama: Who's in your shoes?* Westport, CT: Prager.
- Volkas, A. (1999) "Healing the Wounds of History: Drama Therapy in Collective Trauma and Intercultural Conflict Resolution" in *Current Approaches in Drama Therapy*. Johnson, D.R. and Emunah, R.(eds) Charles C. Thomas, Springfield, Il.